

毛澤東の物語の成立と展開

——日中戦争期から建國初期——

丸 田 孝 志

はじめに

- I. 蕭三による毛澤東傳の執筆
 - II. 毛澤東の物語の成立
 - III. 模範と象徴の物語と略傳の成立
 - IV. 建國初期の物語
 - V. 革命の傳説の成立
- おわりに

はじめに

717

日中戦争末期より中國共產黨（以下、中共）の根據地においては、大衆運動の活性化とともに民俗利用による政治宣傳が民間信仰を取り込む形で展開し、大衆レベルでの毛澤東の神格化が推進された。この時期は、延安整風運動を通じた中共内における毛澤東の權威の最終的確立に伴い、中共公式の黨史が形成される段階にもあたり、中共自身による毛の傳記

やその人物を讚える物語もこれに前後して整えられていった。しかし、このような公式の黨史・傳記・物語が形成されるよりも前に、一九三六年（以下、西暦の「一九」を省略）のE. スノーによる陝北ソビエトの見聞記や毛へのインタビューの内容が新聞・雜誌記事や著作として先行的に普及していた（著作の初版は、*Red Star Over China*, Victor Gollancz, 1937¹）以下、スノー著。スノー著の中國語版（王厂青等譯『西行漫記』復社、三八年）の刊行に際しては、情勢の變化などによる中共關係者とスノー自身による一部の削除・修正が行われており、外國人ジャーナリストの手による記事・著作の内容が中共自身による主體的なイメージ操作との間に矛盾を抱えていたことが理解できる。

民俗利用による神としての毛澤東のイメージ形成は、農村最基層の民衆を対象としたものであり、整風文獻などによる理論學習・路線鬭爭史の學習が高級中級幹部に對するものであるとすれば、平易な文體で書かれた毛の傳記や物語は、黨組織・部隊・學校などで組織生活を送り、教育を受ける環境にある基層幹部・兵士・青少年などを対象とするものであると考えられる。また、都市において刊行される新聞・雜誌にこれらが掲載される場合、その対象は中共の直接的な組織下でない一般讀者も含まれていた。小論は、日中戰爭期から中華人民共和國建國初期における毛澤東の物語の成立と展開について考察する。三品英憲は整風運動以降、確立する中共の「大衆路線」の内實を、毛澤東が「人民の意志」の解釋權・決定權を掌握する過程として描いているが、小論では毛の物語が、このような權力構造とどのような關係にあるのかについて検討し、毛の權威の形成過程において、教育を受ける環境にある階層や識字層がどのように位置づけられていくかについて考えたい。

なお、ここでいう物語とは、個別の史實や回想・證言、民間に流布した傳承、作家による創作など、生涯を通観した傳記とは區別される個々のエピソードを指す。スノーの記事や著作から個別のエピソードが物語集や教科書に採録されたように、傳記から物語が切り出されることもあり、單獨の物語が傳記に取り入れられたり、傳記の一部が個別のエピソードとして先に發表されることもある。このように物語と傳記には密接な關係があるため、まず物語の成立に先行した毛の傳

記編纂の状況について觸れ、雑誌等に掲載された略傳についても、毛の權威の形成過程との關係で必要に應じて言及することとする。⁽⁴⁾

I. 蕭三による毛澤東傳の執筆

石川禎浩によれば、三六年、中共駐コミンテルン代表團はモスクワにおいて中共創立一五周年記念行事の一環として、ロシア人ハマダンによる毛の短文の傳記を刊行しており、これが中共が自ら關與して作成された毛の最初の傳記であると考えられる。同年に執筆された高自立の作と思われる、より本格的な傳記は刊行されることはなかった。⁽⁵⁾ スノー著刊行後、モスクワにおいてようやく中國人による本格的な毛の傳記が刊行されるが、その作者となったのは、湖南省湘鄉縣出身の中共黨員で、東山小學、湖南第一師範學校時代の毛の同窓生、蕭三である。蕭三は左翼作家聯盟駐ソ聯代表としてモスクワに滞在中、三八年一〇月までに毛の傳記をロシア語で執筆・發表し、一二月にはその加筆修正版を雑誌『青年近衛軍 (Molodaya Gvardiya)』に、四〇年には『不可征服的中國 (Kunmái nenofedun)』(ソ聯國立軍事出版社 [Boemizdat]) に發表した。⁽⁶⁾

『不可征服的中國』収録の傳記『毛澤東』は、少年時代から日中戦争の當時の段階までの毛の事績を記しており、彼の手になる一聯の傳記の基礎となっている。この傳記には既に、明晰な頭腦、大衆を組織する英邁な指導力、民情に通じ、民衆に學ぶ謙虚な姿勢、一般兵士への思いやり、質素儉約、規律の遵守、重要な政策・著作による革命への貢獻など、後の毛澤東の傳記と物語の特徴をなす、毛の美德・魅力・能力の基本的內容が既に備わっている。日中戦争期から現代までに成立した毛の代表的な物語一〇四篇をまとめた物語集『毛澤東的傳説』(河南人民出版社、九三年)の編者高珊瑚によれば、毛の物語は、①機智によって臨機應變に敵と鬭争する、②貧しい者を訪ねてその苦しみに耳を傾ける、③指導者自ら規律を守る品性、④その他に分類されるとするが(同書三七三頁)、蕭三による傳記は②、③の他、①の代表的なエピソードも紹介しており、その成立當初から中共政權下で求められる毛の物語の基本的な枠組みをほぼ網羅して提示してい

たといえる。

蕭三が毛の傳記執筆を開始した三八年頃は、前年の王明のモスクワからの歸國後、任弼時がコミンテルン中國支部代表に就任する時期に重なっており、同年九月には王稼祥が中共の統一指導の問題に關して毛の指導権を承認するコミンテルンの指示を延安に傳達している。⁷⁾このような状況を背景に、中共が毛の経歴・人物などの情報をコミンテルンに提供するため、改めて中共独自の視點による傳記を整える必要が生じたものと考えられる。また、スノー著翻譯過程での修正の状況から推察されるように、コミンテルンおよび中共がこれとは異なる独自の權威の根據となる傳記を必要としたという事情も考えられる。

蕭三「毛澤東」は、中共第六期六中全會における毛の報告「論新階段」(三八年一〇月)から、「共產黨員は實事求是の模範でなければならず」、「毎日民衆の教師であり、しかしまた毎日民衆の學生である」という部分を引用して毛の見識を讃えている。この一節から、整風運動において共產黨員の持つべき美德として強調されるキーワード、「民衆の學生になる」⁸⁾が生まれることになる。⁹⁾任弼時はモスクワ着任後、三八年一〇月までに蕭三作の傳記の初稿に目を通し、加筆のための情報を傳えており、「民衆の學生になる」というキーワードも早い段階で傳記に採用されていた可能性もある。毛の權威確立の試みは、延安と同時並行的にモスクワにおいても進められていた。

この時期、毛は中共内において理論的指導者としての地位を未だ確立しておらず、その權威は他の指導者を壓倒するまでには至っていない¹⁰⁾。「論新階段」は「マルクス主義の中國化」という整風運動のもう一つの重要なキーワードも提示しているが、蕭三「毛澤東」は、モスクワでの發表という事情もあつてか、慎重にこの語を避けている。華北の晉東南(山西省東南部)根據地においては、三九年一二月からの國民黨との軍事的摩擦の高まりの中、むしろ八路軍總司令・第二戰區副司令長官の朱徳の權威を高める状況が生じており、朱徳を「中華民族最優秀の子女、黃帝最良の子孫」、「新たな聖人、革命の聖人」などと讃える個人崇拜的な生誕記念儀禮が行われた。同根據地では、四一年頃まで朱徳を中心とした儀

禮が繼續している。¹² 朱徳は紅軍時代より「朱毛」と並び稱され、蕭三はモスクワでの毛澤東傳執筆に際して朱徳傳の執筆も開始しており、毛の權威の確立は朱徳の權威も利用しながら進められていったものと考えられる。なお管見の限り、建國前に傳記が準備される中共指導者はこの二人のみである。また建國前後の新聞・雜誌等には各指導者の紹介記事などが個々に掲載されることはあり、四七年にはこれらをまとめた單行本『人民的舵手』第一輯（太行群衆書店）も刊行される¹³が、その後、確認できるこの時期の各種教科書や單行本において、中共指導者の中で物語が掲載されるのは、毛澤東・朱徳以外は劉志丹・左權などの烈士であり、他には毛澤東が徐特立に宛てた手紙など、毛を主題として他の指導者に觸れるものが一部に存在するのみである。

蕭三は延安歸着後の三九年五月に毛に面會して聞き取りを行い、¹⁴ 四一年一月二四日の『解放日報』に新民學會の發起とフランス留學運動についての短いエピソードを述べた「毛澤東同志的少年時代」を發表した（これらは「我所知道的毛澤東同志的少年時代」¹⁵の二つの節であると解説されている）。整風運動を通じて毛の權威が最終的に確立していく中、四三年には當時毛澤東・劉少奇とともに中央書記處を構成していた任弼時が蕭三に對して、毛の五〇歳の慶祝として傳記の執筆を指示した。蕭三は中共中央宣傳部長胡喬木の支持の下、關係者を訪問し資料を収集して、「偉大的五十年」を執筆したが、毛の謝絶により刊行されなかった。¹⁶ 「偉大的五十年」の一部は、まず四四年七月一日と二日の『解放日報』に「毛澤東同志的初期革命活動——「偉大的五十年」的一章（初稿）」（以下、「初期革命活動」として掲載された。同記事は整風運動の觀點を反映して、マルクス・レーニン・スターリンに對置する形で、マルクス主義の中國での實踐者としての毛澤東を「毛澤東主義」の語を使用しながら讀めるもので、翌年から同名の單行本が各地で刊行されている。

四六年七月一日、蕭三は晉察冀邊區の『晉察冀日報』に國民革命期の毛の活動を描いた「毛澤東同志在大革命時代——「偉大的五十年」的一章（初稿）」を、同月、同區の『北方文化』第二卷第三期に「毛澤東同志略傳」を發表した。ここにおいて、ようやく毛の半生を通觀する中共独自の略傳が中國國內において公開されたことになる（略傳の内容について

は後述)。この頃、蕭三は『毛澤東傳』の執筆と民謠集『中國出了個毛澤東』の編集を主要な任務とするようになり、四七年、晉察冀邊區の『時代青年』に「毛澤東同志的兒童時代」、「毛澤東同志的青年時代」を聯載している。四八年、毛の同意を得て、まず『毛澤東同志的青少年時代和初期革命活動』が刊行されることとなった。¹⁷四九年三月、改めて多くの修正を行った『毛澤東同志的青少年時代』（北京人民出版社、以下『青少年時代』）が、中共中央宣傳部部長陸定一の審査批准を経て刊行され、これが建國初期の毛澤東傳の決定版となった。¹⁸

II. 毛澤東の物語の成立

(一) 物語の登場 —— 雜誌・新聞・教科書 ——

中共自身による毛澤東の物語の刊行は、蕭三による傳記の國內での發表よりも若干早く、四〇年七月、延安で刊行されていた『中國青年』第二卷第九期に「記毛澤東同志」と題する特集記事が掲げられ、四人の元紅軍幹部らによる回想を中心とした四篇の文章が掲載されている。記事の解説では、これらの文章は三年前に書かれたものとされており、蕭三による傳記の執筆よりやや早く、スノーによる記事・著作の發表と時期的に重なりながら、毛の物語の刊行が準備されていたようである。四〇年は、毛がその超越的な指導權確立の阻礙要因になるソ聯留學經驗者らの統制・排除にほぼ成功した時期¹⁹で、延安では澤東青年幹部學校が開設され、儀禮において毛澤東像の單獨使用が初めて確認されるなど、整風運動を前に毛の權威が徐々に高まっていく時期であった。²⁰毛を突出させて讃える物語の刊行は、ようやくこの時期に可能になったものと考えられる。

謝覺哉「幾個斷片」は四つの部分からなる。一つ目は二〇年代に湖南各地を訪問して、『通俗報』に独自の觀察力によるユーモアに富んだ寄稿を行っていた時期のエピソードで、湖南の社會改革運動の組織を志した毛が湖南全土を調査する

計劃を立て、文筆による「物乞い」をしながら謝の故郷を訪れたことも紹介される。二つ目は何叔衡から聞いたという湖南第一師範學校時代のエピソードで、自分の讀書計劃のために、價值がないと判断した授業に出席せず、學生を管理する職員への指示にも従わずに悪態をつき、成績不足で何度か除籍されそうになるという傍若無人ぶりを描いている。三つ目は湖南の労働運動指導者として省長趙恒惕と面談した際のエピソードで、話が折り合わないため、趙本人と知りながら「あなたの話は筋が通らない。我々は省長に直接會いたい」と放言して、趙を動搖させ交渉を有利に進める毛の姿を描く。毛の機轉に富んだ對應と交渉力が評價されている。最後の一つは、秋收暴動の直前、民團に捕えられて護送される毛澤東が機轉によつて危機を脱するエピソード（後に「瀏陽遇險」などの題が附せられる）で、蕭三「毛澤東」とスノー著にも簡単な記述がある。足が痛いふりをして隊列から遅れ、護送人に金を渡して逃亡し、溝に身を伏せて隠れ、彼の正體を知らない民衆の助けを得て逃亡に成功するというリアルな描寫によつて、人間味溢れる毛の姿を傳えている。

譚政「三灣改編」は、秋收暴動の失敗後、意氣消沈する紅軍部隊を毛がユーモアに富んだ演説で激勵する内容で、毛は、敵も我々も「みんなおつかさんから生まれたんだし、敵も二本足、我々も二本足だ。賀龍同志は二本の包丁で身を起こした」「我々には二本の包丁どころか、二個大隊があるじゃないか」などと語りかけている。兵士らの心を動かす毛の辨才は、前述の高自立作と考えられる傳記や蕭三「毛澤東」でも言及されている。

これらは、共産黨員としての素養や徳目を讃える後の傳記や物語とは一線を劃すもので、毛の人間としての魅力が生んだエピソードであり、讀者の關心を引く讀み物として成立している。これらは戦後内戦期の物語集にも採用され、謝の物語の一部は蕭三著の傳記にも利用された他、特に「瀏陽遇險」と「三灣改編」は建國後に毛の代表的な物語としての地位を確立している。獨特のユーモアと機轉で危機を克服していく革命家毛澤東の生身の姿を、毛に最も近い當事者が語ったという点において、價值が認められているからであろう。

莫休「無比的理解力和創造力」は、物語というよりも毛の革命家としての偉大さを賞賛する解説であり、紅軍の規律確

立のため、「三大紀律八項注意」や民主的な部隊運営を提起したことなどが語られる。徐特立「毛主席的實際精神」は、毛が紅軍において兵士の殴打や罵倒、逃亡兵の銃殺を廢止したこと、民衆の生活の改造のために「徹底した調査」を行ったことなどを述べている。これらには蕭三の傳記と同様、その後の物語の基調となる、兵士や民衆の苦しみに思いを致す毛の美德を讃えるというスタイルが既に確認できる。

この特集記事の冒頭の解説では、延安および各地の革命の先達が彼らの知る毛の物語を『中國青年』誌上に發表するか、小冊子として刊行することを求めているが、その後日中戦争期にどのような物語がどのような雑誌や新聞に掲載されたか、先行研究は明らかにしていない。この間、上述の蕭三作の傳記の他には、四一年一月九日と四二年七月一〇日の『晉察冀日報』に、三三制や統一戦線政策を毛の英邁な政策として農民が讃える物語が掲載されている。民衆が自ら指導者を讃えるという設定は、民衆の言動を根據に指導者の權威を高める後の物語の手法を先驅的に捉えているともいえる。しかし、統一戦線を食卓での食事などに政治問題を農民の言葉で表現しようとする試みは、農民の日常生活や信仰などには關わらないため、民衆の生活感覚や民俗的感性を生かすこともできず、成功しているとは言い難い。整風運動前後の毛の權威の向上にも關わらず、四三年前半に山東根據地の『大衆日報』に聯載されたとみられる毛の新たな物語が出現するまで、『新中華報』『解放日報』『新華日報（華北版）』『抗敵報』『晉察冀日報』『大衆日報』といった根據地の主要機關紙では、他に毛の傳記や物語を探すことはできない。様々な劃期性を持つ『大衆日報』の物語については次節で検討することとして、ここではまず、スノーの著作・記事を利用して成立した傳記・物語である、冀魯豫軍區機關紙『战友報』（四三年六月二八日）の無署名記事「毛澤東同志的學習故事 領袖故事之一」と幹部用基礎教育の教科書の物語について検討する。

「毛澤東同志的學習故事」は、毛の「學習の物語」の體裁をとった略傳で、整風運動のための思想教育の教材の一つと考えられる。記事は、毛の青少年時代からマルクス主義者になるまでの讀書・勉學生活、「湖南農民運動考察報告」の作

成にみられる調査研究の實踐や日中戦争期の三つの著作による中國革命の指導と整風運動の實施までを紹介している。ただし、最後の一段落を除く全體の四分の三ほどの、マルクス主義者になるまでの敘述は、全てスノーによる Asia 聯載の記事（中國では汪衡譯が『文滴』（後に『文滴戰時旬刊』）に聯載されて後、『毛澤東自傳』上海黎明書局出版社、三七年などの譯本が刊行された。以下、自傳。スノー著の第四部に相當）のエピソードの要約である。最後の一段において、マルクス主義の眞理の原則を中國の革命闘争に使用したという整風運動の論理に基づいて彼の著作活動が紹介される。この略傳は整風運動に際しての毛の言葉を用いながら、以下のように締めくくられている。

彼自身は、「私は全黨の同志とともに、民衆に學び、引き続き民衆の小學生になりたい。」と言っている。このような虚心に學ぶ態度と最も實際的な學習方法は、我々全黨の最もよい模範となっている。

民衆に學ぶ姿勢は、共產黨員の缺くべからざる素養として強調されるが、毛自身の實踐が、民衆を知り民衆に學ぶ學習の模範となるといふ構造がここに示されている。三品英憲は、整風運動以降確立される中共の「大衆から學び、大衆とともに歩む」「大衆路線」の内實を、「大衆」に關わる決定權・解釋權を毛澤東が獨占していく過程としてまとめているが、民衆の小學生となり、謙虚に民衆に學ぶ毛澤東こそが人民の意志を最もよく知っているという毛の傳記と物語が、教育を受ける環境にある兵士らに對して、毛の「大衆路線」の内實を伝える役割を擔っていることがわかる。

毛澤東は四三年三月の蕭三との面談において、自傳を基にしたと考えられる彼の物語が教科書に掲載されていることを指摘している。²²⁾ 四二年附けの毛の序が附せられた、基層幹部向け基礎教養の教科書、華山『文化課本』（奥附なし）には、このような自傳を改編した物語「毛澤東的少年時代」が確認できる（同書一四〇―一六頁）。同章は四節から成り、自傳とは異なり毛の口述の形式は取らず、毛を主語とした間接話法で敘述されている。

「（一）不願意發財」では、父が營む穀物運送の商賣を、毛は貧乏人に損をさせるものと疑問を抱いたと指摘し、貧農に對する同情から父との確執が起こったと説明する。しかし、自傳では父の商賣を直接批判する記述はなく、母が飢饉の際

に貧民に施しをすることについて父と争ったことを指摘するのみで、父との確執の多くは自身への待遇に對する不満から生じたものとして描かれている。

〔二〕對舊小説懷疑了〕では、毛は儒教の經書を好まず、『水滸傳』などの舊小説を好んだが、これらの小説には農民が描かれていないことに氣づき、二年間疑問を持ちつづけたという自傳のエピソードを紹介する。自傳ではその後、「これらはみな、自ら土地を耕す必要のない武人であり、人民の支配者を贊美していることに氣附いた」とするの⁽²³⁾に對し、『文化課本』では「もともとこれらのものは、大半が人民を麻痺させるために使われたものであったと、後に忽然とわかった。これらは讀者を愚か者にし、奴隸にするものなのだ」(一五頁)と舊小説をより明確に否定する表現になっている。上述の四三年の面談で、毛は蕭三に對して、自身が舊小説に反對したという物語が教科書にあることに觸れ、「これは全く正反對であり、間違っている」と不満を述べている。四六年五月、蕭三は『北方文化』第一卷第六期に「初期革命活動」に關する訂正記事を掲載した際、各地の物語集が同様の舊小説に關するエピソードを収録していることを批判し、毛の意圖は舊小説を批判的に讀むこと⁽²⁴⁾にあったと説明している。しかし、各地の物語集が依然としてこのエピソードを轉載し續けたため、このような毛の「本意」に關する説明は、四九年以後も『青少年時代』の刊行と再版に際して脚注に再掲され續けた。

〔三〕不相信鬼神〕では、毛が八歳以前は母親とともに神を信じていたが、以後迷信を放棄したと述べられており、毛が學校に通い始めてすぐに迷信を放棄したと解釋している。しかし、自傳では「讀書は、徐々に私に影響を及ぼしはじめますます懷疑的になった」⁽²⁵⁾と敘述されているものの、九歳の頃、母とともに父の不信心を改めさせようとしたエピソード⁽²⁶⁾も紹介されており、むしろ子供の頃の毛の信心深さが強調されている。

〔四〕同情被壓迫者〕では、長沙での飢民の暴動や父の荷が貧民に差し押さえられた事件に際して、飢民に同情したことを敘述する。飢民の暴動は、自傳においても毛の全生涯に影響を與えた事件として敘述されているが、後者の事件につ

いて、自傳において毛が父に同情しなかったものの、「同時に農民のやり方も悪いと思つた」⁽²⁷⁾と指摘した部分は、『文化課本』では觸れられていない。

總じて自傳のより現實的な描寫に比べて、『文化課本』では、共產黨員の資質に沿う形で幼い頃から貧しい者に同情心を抱き、搾取や古い權威、迷信に明確に反對する毛の姿が描かれている。これらは毛個人の魅力を伝えるというよりも、指導者の模範的態度を通して、指導者への崇敬の念を育くむとともに、共產黨員が持つべき資質を學ぶという教材としての役割を物語が擔っていることに起因していよう。ただし、毛は上述の蕭との面談で、自身の物語の不正確さに不満を述べた後に、物語を本として出版しようとする動きを禁止したと話しており、毛本人が積極的でない状況において、傳記や物語集の編纂と刊行は十分に進展していなかった可能性⁽²⁸⁾がある。上述のように根據地の主要機關紙に新たな毛の物語がほとんど登場せず、上述の『中國青年』掲載の四篇の文章すら轉載されていないのは、このような事情も關係しているかもしれない。また、この頃まで毛の傳記・物語は、主にスノーの記事・著作に依據せざるを得なかった状況も理解できよう。

(2) 王若望による物語と「爲人民服務」の物語の成立

四三年前半に山東根據地の『大衆日報』に聯載されたと考えられる六篇の毛澤東の物語、若望「毛主席的故事」は、様々な意味で毛の物語の大きな劃期をなすものである。若望とは、四〇年代から九〇年代に至るまで一貫して自由主義的立場から中共指導部を厳しく批判し、労働改造、黨籍剝奪などの處分を受けた作家王若望のことである。四一年、王は延安で黨指導部を批判する壁新聞を發刊し、四三年山東根據地の整風運動でも壁新聞による黨批判を組織して國民黨特務の嫌疑をかけられるなど、この時期から厳しい黨批判と行動力で知られていた。⁽²⁹⁾四三年、山東での整風運動が開始される前に、王は友人から『大衆日報』への寄稿を求められ、自らが関わった膠東地區のトロツキスト嫌疑者救済工作を記事にしようと考えたが、この件が黨外不出の機密事項とされていたこと、毛の「文藝講話」が革命内部の暗黒面を描かない原則

を立てていたことから断念し、「萬一にも間違いない」革命指導者を讃える物語を執筆することにしたという。⁽³⁰⁾

聯載の事實を断言できないのは、現在閲覧可能なマイクロフィルム等の『大衆日報』では、四三年一月、四月、六月分が脱落しており、原史料を確認できないためであるが、同紙四三年九月七日の一面と四面の折りたたみ部分に、王若望著『毛主席的故事』（大衆日报社）の新刊豫告の廣告が掲載されており、『大衆日報』に王による物語が掲載されていたことはほぼ間違いないであろう。廣告では物語名が判讀不能な一篇を除いて、五篇の物語が王の作品として特定できる。残りの一篇は、王の物語の内三篇を轉載した『战友報』（四四年六月三〇日）の記事「若望「毛主席的故事」」で王の作品と確定できる。これら六篇は戦後から内戦期には各地の新聞・雑誌・物語集に收められ、建國後も多くが教科書などに掲載されて、毛の代表的な物語としての地位を確立している。物語の材料の多くは毛の政治秘書胡喬木との會話の中から得たとされるが、毛が一負傷兵士の希望に應じて、その臨終に立ち會い、自ら棺を擔いで葬送する（一個傷兵的願望）、村を訪れた際に出迎えた民衆の中から病氣の子供を見つけ、自分の車で病院に送り命を救う（孫澤東）、後に「愛護孩子」などと改名）などの筋書きは、史實を相當に脚色した創作に近いものとも考えられる。ただし地名などは具體的であり、王の政治問題のために、史實を検證、記録して後世に伝える試みが、その後放棄された可能性も完全には排除できない。創作の性格が強ければ、これが一つ目の劃期性となる。

上を含めた場合の二つ目の劃期性は、紅軍時代までの傳承によって構成されていた毛の物語や傳記に替わり、現在の毛の姿を伝える物語が出現した點である。これは、毛の側近との交流があった王若望によってこそ可能となったものであるが、これ以降内戦期までに創出される毛の物語は、同時期の彼の活動を伝えるものが主となり、進行中の革命の物語として人々の關心を集めていく。

三つ目の劃期性は、「一個傷兵的願望」「孫澤東」「一張名片」（黨員の戦死者数を記憶していない旅長を叱責する物語）において、個々の兵士の死や民衆の命に向き合う毛澤東のイメージが付與されていることである。「一個傷兵的願望」は、毛

自らが他の指導者らとともに棺を擔ぎ墓碑銘を揮毫した四二年三月の黨中央幹部張浩の追悼會に着想を得たものとも考えられる。³²⁾ 王はこの物語を山東での傷痍軍人慰問の活動の中で書いたと回想している。

個々の兵士の死に向き合う毛のイメージは、中共自身が後にその演出に盡力することになり、「爲人民服務」(人民に奉仕する)の物語が生み出される。四四年九月、延安で開催された中共中央警備團兵士張思徳の追悼會において毛澤東は、後に「爲人民服務」と題される有名な演説を行い、今後、軍隊内の死者について、炊夫であっても一般兵士であっても多少とも有益な仕事をした者であれば、その者に對して葬儀、追悼會を行い、これを制度化することなどを指示した。この記事は『解放日報』に掲載され、革命のための犠牲を弔う毛澤東の美談が、その權威の最終的確立とともに形成されていった。無数の無名の死を意義あるものとして可視化することは、根據地の安定化、中共の權威の向上に重要な意義を持っていた。中共の權威を代表する毛澤東の表象もまた、追悼の組織化をひとつの契機として導入されようとしていた。「爲人民服務」は、文字通り人民の利益に奉仕する中共の革命の理念を提示したものであるが、この演説で賞賛された「人民のための死」という概念は、自己犠牲による人民全體への奉仕の道徳を強調するものであった。張思徳の追悼會に参加した警備團の代表は、「毛主席の指示に従い、張思徳の人民の利益に奉仕する模範に學び、彼の意志を繼承して更に努力していく」(『解放日報』四四年九月二日)と宣誓した。人民のための革命を英邁な指導者の指し示す方向へと回収する構造は、善なる天の下す命³³⁾天命によって統治する傳統的な正統性理念に親和性を持っており、根據地の各種模範は新社會の「狀況」、人民の「功臣」の呼稱を與えられるようになる。

四五年四月からの中共中央七全大會での毛澤東の最高指導者としての地位の最終的確立に際し、毛澤東思想を黨の指導思想とした新たな黨章にはこの精神が明記され、「爲人民服務」は中共の指導思想を示す標語として定着していった。既に整風運動において知識人向けの標語である「實事求是」が毛の思想を表す言葉として定着していたが、この語に比して、毛自身の物語から生まれた「爲人民服務」は、多くの犠牲を伴う革命と戦争の中にあつて、大衆の共感を得やすい語とし

て提起されたものと考えられる。「毛主席の『爲人民服務』の精神」に學ぶという姿勢は、三品が述べたような人民の意志の解釋權と決定權を毛澤東が獨占するという構造を端的に示している。七全大會の黨章修正の報告において劉少奇は以下のような言葉で、黨の規律、人民の意志に従い、人民に奉仕する姿勢を根據とする毛の卓越した地位を確認している。「（）内は引用者」。

毛澤東同志は我が黨の指導者であるが、我が黨の一人の普通の黨員でもある。彼は黨の支配の下にあり、最も謹嚴な態度で黨の全ての規律を守る。彼は人民大衆の指導者であるが、彼の全ては人民大衆の意志に基づいている。彼は人民の前では最も忠實な勤務員であり、最も慎み深い小學生である。（中略）我が黨と我が民族には、このような偉大な指導者がいて、またこのような（毛澤東思想で武装した）大量の幹部がいるので、我々は無敵であり、また我が民族と人民の全ての敵に勝利できるのである。⁽³⁴⁾

また、同大會において、張聞天は以下のような言葉で毛澤東と人民の一體化を表現している。

彼の思想と情感は民衆の思想と情感であり、彼の苦しみ、歡喜と憤怒は人民の苦しみ、歡喜と憤怒である。（中略）彼と人民の「結合」はこのように密接であり、そのため一體彼が人民なのか、それとも人民が彼なのか區別ができない！（中略）彼がそのように謙虚で慎み深いのは、そうでなければ人民によく奉仕できないことを知っているからである。（中略）これは中國プロレタリアート、中國人民、中華民族の血肉の中から生まれた稀有の傑出した偉大な人格である！⁽³⁵⁾

張聞天はこの報告で民衆の小學生となる毛澤東を讃えるとともに、自らは毛の學生になる意志を表明しており、人民の意志との一體化を根據とした毛の卓越した指導權が確認されている。以後、「爲人民服務」は模範と烈士に使用されるスローガンとして、軍を中心に使用され、大衆運動を通じて社會へと廣がっていくことになる。

王若望の物語の四つ目の劃期性は、「一張名片」の冒頭において、毛の人々に接する態度を母親の優しさ、父親の厳し

さに例え、毛の權威が擬制的な家族關係として説明されていることである。⁽³⁶⁾ 様々な社會關係を血縁の比喩によつて説明する「血縁同氣の感覺」は、個別性の強い中國社會において人々に一體感を付與する汎用性の高い理念であり、この後、毛澤東の恩徳を父母の慈愛に例える形式が定着していく。⁽³⁸⁾

また、このような理念を基礎として、天命を受けて全ての人々に幸福をもたらす至高の聖人である皇帝を親とし、王朝を家とする「忠孝一致」の權力觀が導入されることにも注意が必要であろう。文革期に頂點に達する「父よりも母よりも親しい毛主席」という家族の上に立つ毛澤東の權威の説明は、創作の物語の成立とともに、既に意識的に準備されていたといえる。なお、この物語、「一張名片」では「ある人は毛澤東同志を、地球を温め照らす太陽にたとえる」(『战友報』四四年七月一日)とも述べており、この比喩は四四年の「東方紅」の正式な発表よりも早く、毛を太陽にたとえる表現の先驅けにもなっている(その後、『東北日報』四五年一月一〇日では、「冬の暖かい太陽にたとえる」と、より平易な表現に替えられている)。

劃期性の五つ目は、「孫澤東」と「在戲院裏」においては子供がモチーフとされており、兒童が讀者として意識されていることである。「在戲院裏」は、劇場に遅れて到着した毛が、劇團の責任者や觀客の勧めにも關わらず、規律を守り、前方の席に座ろうとしなかったが、結局前方に招かれてしまったので、子供の席に座り、子供を膝の間に挟んで一緒に觀劇をした、というものである。指導者自ら規律を守る態度、機轉の利いた對應は多くの物語に共通するテーマであるが、子供と親しく交わる人柄がもう一つのテーマとして加えられている。王の物語の多くは建國後、兒童用教材の代表的作品としても採用されている。⁽³⁹⁾

「精兵簡政」は、毛が「自分が小學生になる」よい機會」として、邊區參議會で參議員の意見を聴取したことを傳えている。「招待「貴賓」」は、延安に毛澤東を訪ねた關中の農民らが、毛の手厚い歓迎を受ける物語で、「民衆の小學生になる」という毛の謙虚な姿勢がテーマのひとつであり、その實踐を平易な物語として描いたのも王が初めてである。農民ら

が回民を差別的に語るのを毛が諫める場面があり、「民衆の小學生になる」ことで「民衆の先生とな」った毛が粘り強く民衆を導く姿が物語のもう一つのテーマとなっている。

以上のように王若望が自身の感性によって、中共の意圖や大衆の嗜好などを汲み取って生み出した物語は、毛の權威の説明を發展させる重要な契機となった。毛のような中共最高指導者の物語の執筆は、一般には情報を得られる側近・中央幹部などが、黨組織の許可や指示を受けて、ようやく可能となると考えられる。王が正式な黨の指示や要請を受けていたかは不明であるが、延安で壁新聞による黨批判を組織した經驗を持つ彼であれば、これらがなくとも萬一の批判も恐れずに筆を揮うことができたかもしれない。そうであれば、客觀的な條件を備え、タブーを恐れない王こそが、毛の物語の發展を可能にしたことになる。いずれにしても、生涯にわたって中共權力の專制的性格を批判し續けた王自身がこのような物語の劃期性を切り開いたことは、歴史の皮肉であったといえよう。

四四年一二月四日の『戰友報』には、一般兵士と苦勞を共にする指導者らの姿を描いた「困苦時代 毛澤東親手發棉衣 朱總司令的扁擔」が掲載されている。民衆や一般兵士と苦樂をともにする指導者の美德が敘述されているが、これらには上述のような王が生み出した諸要素は付與されていない。いずれにせよ、王の物語も日中戰爭期には主要な機關紙に轉載されることはなく、毛の物語が普及し量産されるのは内戦期以降のことのようである。

Ⅲ. 模範と象徴の物語と略傳の成立

(1) 模範と象徴の物語

王若望作の物語の誕生からおよそ半年後、延安では四三年一〇月から一一月にかけて第一回陝甘寧邊區勞働英雄大會が開催され、農業生産などの民衆の模範が多數選出された。延安ではこの頃から毛が模範などの民衆の代表に接見する行事

が春節などに繰り返され、「民衆の権力」を代表する毛と中共の正統性がアピールされるようになる。これを機に「民衆を指導して、その生活を豊かにする」毛とその路線に忠實な模範とのふれあいがあるが、新たな毛の物語の要素として加えられるようになった。『解放日報』は邊區第一等勞働英雄の吳滿有が、公務に多忙な毛のために農地の代耕を申し出たことを報道し（四四年二月一日）、また彼が毛の家を訪ねて親しく語り合う物語が同紙に發表されている（四四年八月二三日）。

一方、日中戦争末期から内戦期にかけて華北の根據地では、毛の肖像が神像の代替として使用され、民衆が毛を「生きた神仙」と讃える姿が報道されるようになっていく⁽⁴⁰⁾。しかし、物語の中で毛に關わる奇跡やその神格化は、主になるのは管見の限り内戦期以降であり、しかもその数は非常に少ない。文字を解さない民衆に對する毛の神格化は、主に民謡や儀禮、戯劇などが擔つていたからである。ただし、これらの報道は民間信仰の文脈で毛を崇敬する民衆の姿勢を受け入れることを讀者に迫っており、民衆の意志を根據として毛の權威を極點にまで高める毛の象徴の物語が、これを機に成立していく。

内戦期には、毛澤東の物語集が各地で出版されるようになり、これらには上述のような毛の傳記の斷片や物語、自傳を基にした様々なエピソードの他、重慶會談の報道記事や毛に會見した歐米のジャーナリストの記事、中共幹部による毛澤東思想に關する解説を収めたものもある。重慶會談の報道は根據地の機關紙に掲載されたもので、重慶の知識人、學生、勞働者らが、「人民を指導して平和、團結、民主のために鬭争する」毛を熱烈に歓迎する様子が語られ、「中國人には大きな救星が現れたことを私たちは知っています。その救星はあなたです」と記した女工の手紙が紹介されている⁽⁴¹⁾。重慶會談を契機に中國人民の指導者としての毛のイメージを強調しようとする中共の意圖に基づき、毛の動靜に關する集中的な報道が行われ、毛の物語も本格的に普及していったものと考えられる。

内戦期の物語集の表紙には毛を取り巻く子供達を描いたものもあり、⁽⁴⁴⁾ 兒童用の教材としての刊行が開始されていることがわかる。また、根據地で使用されたとみられる小學校低學年識字用教科書（表紙・奥附缺）は、土紙油印の極めて簡素

な版本で政治的な内容はほとんど含まれていないが、「毛主席」の章が立てられており、毛の肖像画の下に「彼は太陽よりも輝いている。お友達は皆拍手して歌を歌う」という文が添えられている。基層の年少者に對しても毛澤東崇拜を推進する方針が確定していたことが理解できる。

内戦末期には、毛の權威を象徴するキーワードが中共の下部組織に定着していく。四九年七月、共產主義青年團中央團校の卒業式において學生代表は、臨席した毛に對し、「あなたは私たちの慈父です。(中略)私たちは卒業後、あなたと黨中央の指導の下、引き續き人民に奉仕し、この世代の青年を團結させ、教育することに努力します」と誓いの言葉を述べた。毛に會った感動を二人の學生が綴った文章と誓いの言葉は、『中國青年』に發表されており、この文章自體が毛の權威を讀者である青少年らに浸透させる役割を擔っている。⁽⁴⁵⁾

「爲人民服務」のスローガンは都市の一般の青少年にも、學校教育を通じて浸透しつつあった。四九年四月、北平市で開催された全國婦女代表大會に参加した北平紅廟小學校の一兒童は、一般兵士と變わらない朱徳の素樸な身なり、子供を愛する優しい姿に觸れ、これらを國民黨の將兵の規律の悪さと比較し、「毛主席、朱總司令は人民の指導者であり、彼らは人民のために働いているのだ」と気づき、自分も一生懸命勉強し、労働者・農民に奉仕し、人民のためによりことを行おうという決意を述べている。同じく『中國青年』に掲載されたこの記事によって、人民と中共指導者との關係を説明する模範的解釋が、更に社會に浸透していくことが期待されている。

毛の權威が農村や地方都市の青少年にどのように浸透していたのかを示す史料は極めて乏しい。河北省邢臺地區の生徒(作文の水準から中學生と推察される)は、新民主主義革命の苦難の行程を航海に例える散文詩を作り、「人民に奉仕する者はこの船に乗れ」という臺詞を文中に綴っている。地方の學校教育においても「爲人民服務」の精神が必須の學習内容となり、浸透しつつあったようである。⁽⁴⁷⁾ 一方、河北省涉縣農村のある小學生は、貧民が主人公となり、貧雇農の子供が自由文具を買えるようになったと聞き、「死んでも黨と八路军、毛主席を忘れない」と日記に綴っている。⁽⁴⁸⁾ 日記は教師が

朱筆を入れて指導を行うなかば公的なものであるが、ここには血縁関係の比喩も「爲人民服務」のような政治スローガンも見当たらない。農村の児童が素朴な「報恩」の觀念に基づいて毛と共産黨を認識する狀況が確認できる。新聞・雑誌の報道においても、基層大衆の毛への崇敬の念の多くは「恩人」という形で表現されていることから、血縁関係による比喩や「爲人民服務」の觀念は直接的には一定の教育水準にある人々を対象としたものであることがわかる。

この頃には毛の權威の擴大・定着に伴い、毛その人の物語の他に、毛の象徴にまつわる物語が成立していく。延安での搶救運動（スパイ摘發運動）を題材とした物語は、自白大會の會場に掲げられた毛像に心を見透かされているような不安を抱くスパイの姿が描かれている。⁽⁴⁹⁾ 四六年七月一日の晉察冀軍區機關誌『抗敵報』には、『晉察冀日報』に掲載された毛の寫眞を自宅から小學校に持ち出して、同級生とともに肖像に敬禮する児童が先生に褒められるという物語が掲載されている。實際に當日の『晉察冀日報』には、蕭三「毛澤東同志在大革命時代」の傳記とともに毛の巨大な寫眞が掲載されており、このような像の使用を促す意圖が明らかである。四八年二月二〇日の『冀魯豫日報』には、新華社電の延安周邊の遊撃地區のニュースとして、神出鬼没の遊撃隊が國民黨の據點に潛入して「毛主席萬歲」のスローガンを書き、國民黨側が「蔣主席萬歲」に書き換えても、二日續けて「毛主席萬歲」に書き直したという記事が掲載されている。この記事は建國後多くの教科書に掲載されている。小學校の國語教科書や雜誌には、自宅の竈神像を除き毛像に貼り替える農民の歌が掲載された他、プラハでの國際學生聯合會成立大會で毛澤東バッヂを各國青年と交換する中國青年代表、入黨儀式に際し毛像に叩頭をする農民の姿などが描かれるようになる。入黨儀式で貧農は「毛主席に會うと 大旱魃に雨を得たようだが本當は叩頭してはならないのだが 止められない」と發言しており、農民が自身の規範意識によって毛を崇敬する姿が好意的に表現されている。⁽⁵⁰⁾ 民衆の言動に依據して個人崇拜を稱揚するこのような手法は、後述する「革命の傳説」にも受け継がれている。

この他、毛の象徴によって、家族のつながりをも政治化しようとする報道が現われるようになる。ある農民が部隊の息

子に宛てた『戦友報』掲載の手紙では、彼が土地改革の恩恵を毛に感謝しており、迷信をやめて毛像を購入したこと、息子が部隊で活躍して無事帰宅すること、功績を立てることを願っていることが記されている。⁽⁵¹⁾以後、このような家族の情を基に「忠孝一致」の精神が革命の物語の重要なプロットとして発展していく。

プロパガンダ藝術としての毛澤東像を長期的視點で考察した楊昊成は、繪畫の中に毛の肖像を描く「畫中畫」の手法によって、毛は「益々生身の身體を離れたシンボルとなり、様々な人々が必要に応じて求め、發言權を争う際に依據する疑うことのできない力となる」と指摘している。⁽⁵²⁾毛像の畫中畫の手法は、内戦期の根據地の出版物の挿繪などで既に素様な形で成立していたが、毛の象徴の物語もこれと軌を一にして成立しており、畫中畫と同様に毛の權威がその象徴を通じて、彼の身體の時間と空間の制約を越えて自在に浸透する段階に入ったことを物語っている。

これと同時に抽象化された毛の精神も物語のテーマとなっている。霄朗「毛主席能治精神病」は、精神錯亂を起こして入院し、發作を繰り返す退役軍人が、「これは毛主席の命令だ」などと諭されることで治癒に向かっているという物語で、毛が代表する組織規律への服従がテーマとなっている。退院して毛と會見した元軍人は、「久しく別れていた父母に會つたように喜び涙を流し」たとされ、毛との關係は、ここでも親子の情に假託して語られている。⁽⁵³⁾この時期の根據地の報道では、中共の政策方針を民衆が「毛主席の政策」と讚え、參軍（徵兵）運動や軍隊内の立功運動を「毛主席の功臣となる」と表現するなど、權力を毛その人として提示する「權力の人格化」ともいべき状況が進展している。毛の名を冠し、その精神を體現した政策・組織・模範などに關する一聯の報道は、いわば象徴化された毛の物語として大量に流布され、毛の物語の新たな形式として定着していく。ここに至って模範の物語は、吳滿有の場合のような毛その人との接觸を必要としない段階に達していた。

王旦林「毛主席比我更辛苦」という物語では、山西省平順縣のある區長が、土地改革の慶祝大會において民衆が感謝の念を込めて衣食や金錢を贈ろうとしたのを拒否し、「毛主席は私より大變だが、民衆のものを何かとったことがあるか？」

と語っている。⁽⁵⁴⁾「做毛主席的小學生」では、「常勝將軍」と讃えられる劉伯承が自身の軍功を「これは毛主席の指導の功績だ」と語り、「毛主席の小學生になる」姿勢を表明している。⁽⁵⁵⁾内戦期の冀魯豫軍區において模範部隊を率いて活躍した王克勤は、前線での臨終に際して、「死ぬまで貧乏人に奉仕し、人民のために立功したと毛主席に傳えてくれ」と語ったと報道され（『冀魯豫日報』四七年七月二三日）、模範の死は毛の「爲人民服務」の精神によって意味付けられるという形式が整えられている。毛の精神は、その象徴の物語と同様に物語の中の多數の模範の實踐により、彼自身の時間と空間を超えて浸透する場を得ることとなった。

(2) 略傳の成立

蕭三「毛澤東同志略傳」（『北方文化』第二卷第三期、四六年七月）は、「初期革命活動」と同様、毛の革命活動を整風運動の文脈でマルクス・レーニン主義の中國化の實踐として描くもので、共産黨員向けのテキストらしく、毛の讀書生活や學習姿勢にも焦點を當て、歴任した役職やその著作について仔細な敘述を行っている。著作を列擧する形式は上述の「毛澤東同志的學習故事」と同様であり、マルクス主義の理論家・中國革命の指導者としての毛の功績を顯彰し、宣傳・教育する意圖に即したものと考えられる。

同略傳では國民黨との權力鬭争の最終段階を意識して、人民に奉仕し民衆の學生となる大衆路線の實踐者として、毛澤東が人民の指導者たるべきことを確認しながら、多くの民衆が毛を「毛聖人」「救星」「福星」と稱していると指摘し、毛は「中國有史以來初めての正しく人民を救う、人民のために福をもたらす聖人である」と強調している。毛は傳統政治の文脈において、中華の統治者にふさわしい眞の聖人の地位を與えられたのである。この後、蕭三による略傳と同様の體裁の毛の略傳が、共産黨員の基礎教育の教材に掲載されるようになる。西北局宣傳部が編纂し、晉南工作委員會が複製した『黨員課本』（四九年）掲載の毛の略傳は、毛と「人民の意志」の関係について以下のように記述している。

毛主席は共産党中央委員の主席であり、全黨の領袖であるが、我が黨の一人の普通の黨員でもある。彼は黨の支配の下にあり、最も謹嚴な態度で黨の全ての規律を守る。毛主席は中國人民の領袖であるが、彼はまた人民の忠實な勤務員でもある。彼は人民の意志のもとに誠心誠意、人民のためによいことを行う。⁽⁵⁶⁾

一見して明らかのように、この部分は上述の劉少奇報告を基にしているが、同略傳では、この後に邊區の防衛、生産の發展、土地改革などの毛の功績を示した上で、「毛主席がいて、毛主席の指導があれば、中國革命は必ず勝利し、中國人民は必ず解放される。それで中國人民は、彼を「救星」「毛聖人」と稱する」という文章が續き、最後に邊區の青年が最も好む歌として「東方紅」が紹介される。黨と人民の意志に對する毛の服従の強調と、それを根據とした彼の正確無比な指導への賞賛が表裏一體となつて、極端な形で提示されている（劉少奇報告では、民衆は中共を「救星」と認めていると指摘している）。この略傳の形式は、建國後も黨員の基礎教育の教科書に掲載され、繼承されていく。⁽⁵⁷⁾

IV. 建國初期の物語

(1) 民衆の證言と「忠孝一致」の物語

建國初期には、革命時代の當地の民衆や毛の護衛員などの證言の形式で、新たな物語が加えられるが、日中戦争末期に形成された、人民に奉仕する模範、父母のような慈愛に満ちた毛のイメージは、これらの物語へ繼承されていく。

井崗山の民衆が毛のいた時代を懐かしみ、彼の歸還を長い間待ち侘びていたとする『新華月報』の記事では紅軍の北上後、魏連發という人物が「父よりも母よりも、毛朱にいて欲しい」という歌を作ったことが紹介される。⁽⁵⁸⁾「路遇傷兵」という物語では、負傷した農民兵が、毛が自身の綿入れを脱いでかけてくれたことに感激して、「あなたはまさに我々の父母だ」と語っている。⁽⁵⁹⁾徐松林『紅軍時代の毛主席和朱總司令』（湖南通俗讀物出版社、五二年）は、一紅軍兵士の視線から、

質素な身なりと質素な食事で働き、兵士と苦樂を共にする毛澤東と朱徳の姿を描いている。護衛員陳昌奉の視線から長征途上の毛の姿を描いた二篇の物語では、マラリアで動けなくなった陳に自らコートを脱いで着せるなど、毛の陳に對する心遣いが、「父母より私を深く愛してくれる」、「父母より優しい眼差し」といった表現で語られ、父母に勝る毛の愛情が示されている。⁽⁶⁰⁾毛が紅軍兵士の待遇改善に關心を寄せていたことは、上述の莫休、徐特立の文章が既に觸れていたが、當事者が平易、具體的に語る證言は、読み物としてより魅力的になったであろう。

毛とのふれあいに關する延安の農民の證言を記録した文章の一つ、「孩子、拿起槍保衛毛主席！」では、孫永聚という老農が、土地を得た上、四六年春節に祝壽の宴に招待されたことに感激し、翌年春の國民黨軍の延安侵攻に際して、息子を軍隊に入隊させたことを語っている。息子は戦死したが、孫は悲しみをこらえつつ、以下のように語る。

私は息子が黨中央を守り、毛主席を守り、人民の幸福な生活を守るために死んだことを時に光榮だと思い、このような息子がいて、自分も嬉しく思うことがある。今孫が學校に行っているが、私はよく孫にこの話をして、お父さんを見習って、永遠に共產黨と毛主席についていくようにさせている。⁽⁶¹⁾

革命のための犠牲を稱揚する「爲人民服務」のプロットは、日中戦争から朝鮮戦争までの戦時動員體制の構築の中で、權力を確立していった中共政權の核心的な價值として、共和國に受け継がれていた。ここにおいて「爲人民服務」の精神は、その親から子・孫へと繼承される「忠孝一致」の形態をとって明示されている。

これに對して人民解放軍の軍人には、「忠孝一致」から更に進んで、家族の愛を超えた革命への奉仕が求められる。小學校の國語教科書に掲載された「鐵脚團長」という物語では、日中戦争と國共内戦を戦い抜いた解放軍のある團長が、敵軍討伐の途上に故郷の母親を訪ねると、母親は「毛主席に教え育てられて、あなたはこんなに大きくなった」と言い、息子を慰留しようとするが、團長は「毛主席は「我々のやることはまだ多い……今までの仕事は萬里の長征の第一歩を完成したばかりだ」と言っている」と語り故郷を後にする。母子ともに毛澤東の教えを前提に對話し、團長は母親の慰留を振

り切り前線に赴いている。

この他、毛の物語においては、毛の大衆路線の權威の下、民衆の思想・行動を尊重すべきとする壓力が形成されつつあった。「過橋」という物語では、橋の上で脱輪した重砲車を引き上げるのに、小隊長が「毛主席が言っただろ？民衆に相談すれば何でも解決できる」と言つて、民衆を集めて議論させる。そして、一老農の提案と指導により、浮力を利用して船上に立てた板で川から重砲車を突き上げる方法で脱輪を修復する。⁽⁶³⁾このような専門的な知識・技術に勝る民衆の實力を毛の「偉大な指導方法」の下に認めることが、讀者に求められている。このような壓力は後述する「革命の傳説」においても確認される。

(2) 『毛澤東的故事和傳説』の刊行

建國初期、小學校の國語教科書、黨組織や軍の基礎教育の教科書等には、内戦期までに成立した毛の物語が掲載されるようになり、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの物語と並置された形で毛の物語を集めた物語集も出版されている。⁽⁶⁴⁾しかし、建國後初めての毛單獨の総合的な物語集である『毛澤東的故事和傳説』（中國民間文藝研究會整理、工人出版社。以下、『故事和傳説』）が北京で刊行されたのは、五四年一月になってからである。前年の反革命鎮壓運動の終熄、「過渡期の總路線」の採擇、朝鮮戦争休戦協定の締結などにより建國初期の混亂と戦時動員體制が一旦終熄し、新しい政治段階を迎えるのに對應したものとみられるが、同年一月一日は農曆では癸巳年十一月二十七日であり、光緒十九年（癸巳年）十一月十九日（一八九三年十二月二六日）生まれの毛は、還暦を迎えたばかりという絶妙のタイミングでもある。關係者はこの事實を十分に認識していたであろう。蕭三による一聯の傳記は、内戦期以降『青少年時代』に至るまで、毛の誕生日を陽曆年と農曆の年月日によつて掲載し續けており、『晉察冀日報』は毛の農曆の誕生日の翌日、新曆の誕生日の二日前（四五年二月二四日）に毛の物語を掲載したこともある。四九年の中共第七期二中全會は指導者に對する祝壽活動

などの個人崇拜を禁じる決定を下していたが、建國後上海や漢口で發行された農曆併記の民間曆には新曆によって毛の誕生日を記載したものもあり、毛の誕生日はある程度社會に認知されていたと考えられる。物語集の刊行が、農曆にも依據して民間活動の體裁をとったささやかな記念行事として行われたという推測は、十分に成り立つ。

本書に収められた物語から、建國後の物語の特徴の一端を伺い知ることができる。まず、収録された一八篇の物語全てに口述者・作者・記述者・改編者などが記載されているが、王若望作の二篇の物語（「一個傷兵的願望」「愛護孩子」）は、『毛主席故事選』（晉察冀新華書店出版）に基づき改作、「元記者不明」として、改編者名のみが記載されている。王は延安や山東根據地での言動で當局や知識界の注目を集めた一方で、山東では毛の物語の作者としても知られていたから、毛の權威への影響を恐れて作者名が抹消されたのではないかと考えられる。王の作品は、既に戦後には作者名が掲載されなくなっている。

編者によれば、これらは、①回想（口述）、②作家による創作、③民衆の口頭傳承・創作に分類される。対象時期はソビエト革命期一〇篇、日中戦争期四篇、戦後内戦期から建國前後二篇、その他二篇（太古の傳説一篇、ソビエト革命から建國まで一篇）であり、ソビエト革命期が半数以上を占める。成立時期については、五篇が日中戦争期もしくは内戦期に初出を確認でき、三篇は建國後の雑誌から再録したものである。その他の成立時期は不明であり、建國後に収集、成立した可能性が高い。取材地の記載があるものは二篇（江蘇省吳縣と江西省瑞金）である。王若望の作品以降、戦後内戦期までに成立した毛の物語は、同時進行する現實のテーマに取材することが多かったが、建國後は、土地改革を革命の中心課題に据え、井岡山以來の毛の革命路線を正統とする中共の歴史觀を基に、回復した舊根據地の取材などを通じて、ソビエト革命期の物語が大量に補われたものと考えられる。

内戦期の物語集に収められた物語の内、一部はこの物語集には採録されていない。四〇年の『中國青年』に掲載された元紅軍幹部らによる四篇の文章は、内戦期には各地の新聞・雑誌にも廣く取り上げられており、高華によれば、徐特立の

文章は『毛澤東選集』（蘇中出版社、四五年）の序にも使用されていた。⁶⁷しかし『故事和傳説』に採録されたのは、謝覺哉「瀏陽遇險」と譚政「三灣改編」のみである。謝のエピソードの内、革命活動に直接関係しないものが採録されなかった他、労働運動の物語が採録されなかったのは、趙恒惕が毛のおかげで運動の暴走が抑制されたと評價する発言をしており、省長への請願という穏健な運動形態が中共執権後の政治状況に合わなくなったためとも考えられる。

莫休・徐特立の文章はエピソード性に乏しく、物語集には相應しにくい⁶⁸が、莫休は後に新疆で盛世才に逮捕され中共を離脱した徐夢秋の筆名であると推察され、作者の政治問題が影響した可能性もある。徐特立の文章は、紅軍内での兵士虐待の指摘や、表題「毛主席的實際的作風」に關して「毛主席の工作作風は、確かにレーニンの作風である。レーニンの作風はロシアの革命精神とアメリカの實際的な作風であり、上に私が書いたのは毛主席の實際的な作風である」とした表現が問題となった可能性がある。この二篇は、謝による毛と趙恒惕との交渉の物語とともに、管見の限り建國後の他の媒體でも確認できない。

この他、『故事和傳説』には幼少期のエピソードも採録されていない。自傳の内容を改編したエピソードも建國後には見られなくなり、幼少期の物語については、蕭三が『毛澤東同志的兒童時代』の執筆過程で新たに發掘したエピソードが教科書に掲載されたり、これらに獨自の内容を加えた兒童向けの本が刊行されるようになって⁶⁹いる。

王若望の作品については、中共の軍隊が國民革命軍に編入されていることを背景とする「一張名片」のみが、建國後の物語集や教科書には採録されていない。ただし、内戦期の物語集では莫休や徐特立の文章などと同様に、「一張名片」も代表的な物語であった。これに限らず、上述の舊小説に關するエピソードや「初期革命活動」の内容について、蕭三が求めた訂正が各地で長く放置され、その後も初稿が版を重ねていったことなどから考えれば、一旦刊行された傳記や物語の權威は高く、情勢の變化なども顧みられず各地で無批判に流用されていた可能性がある。このようなある種の「緩さ」は、王若望による大膽な「創作」とは反對に、むしろ「偉大な領袖の公式の物語」に基本的な疑義を差し挟むことすら許され

なくなつた、思考停止の状況を反映しているのかもしれない。物語の内容が厳密に精査され、取捨選擇されていくのは建國後からのようである。

V. 革命の傳説の成立

戦後内戦期以降、中共の指導者や紅軍に關わる事物が民衆のために奇跡を起こす物語（以下、「革命の傳説」）が創作され、民間信仰を利用しながら中共の權威形成に利用されていった。⁽²⁰⁾ここでは、毛澤東に關する革命の傳説を取り上げ、その構造について検討する。

「毛主席和關帝聖君」は、譚吐「毛主席的故事—陝北民間傳説」と題された、四九年刊行の六つの物語の一つで、關帝廟の補修の是非を巡る農民の議論の物語である。ある者は、「貧しい者を指導して革命を起こし、貧しい者を立ち上げらせてくれた」毛主席こそが「本當の聖人であり、廟を修復したら毛主席を祭ろう」と提案し、「關帝聖君は最も信義を守る」という主張に對しては、「毛主席こそが人民に對して最も信義のある人だ」と反論がなされた。ある者は、關帝廟で祈っても早魃が避けられなかつたが、毛主席の話を聞いて凶作を乗り切ることができたと主張し、議論の末、毛に手紙を出して問うこととなつた。返事を受け取つて戻つてきた者が皆に語つた内容は、湖南農民運動の際、關帝廟に集會所を設けた農民協會に對し、地主らが「神を欺き、道義を滅ぼすものだ」と攻撃したのに對し、毛澤東は農民を率いて關帝に會い、農民を助けない關帝を問い詰めると、關帝は答へに窮して逃げてしまつた。その後、農民は關帝を信じず、農民協會の話信じるようになった、というものである。⁽²¹⁾

この物語は、農民の道德規範となり、生活の望みを叶えてくれる眞の聖人が毛澤東であるという形で、關帝信仰を毛澤東信仰へ置き換えるものである。毛の指示に従い、自ら早魃、凶作を克服していく民衆の姿勢は、民衆の信仰や道德規範と一致し、矛盾しないものとして提示されている。日中戦争末期から國共内戦期にかけて根據地では、神像の毛澤東像へ

の貼り替えが実際に行われていたが、物語で言及されている湖南の農民運動に關する毛の論文「湖南農民運動考察報告」には以下のような敘述がある。

「農民會を必要とせず、關聖帝君、觀音大士のみを必要とすれば、土豪劣紳を打倒できるだろうか？それらの「帝君」「大士」からもまた哀れなもので、數千年間敬われて、一人の土豪劣紳も打倒してくれなかったではないか！」「現在あなたたちが減租をしようとするなら、どういう方法があるだろうか？神様を信じるのか？それとも農民會を信じるのか？」私がこれら話を話すと農民はみな笑い出した。彼らの笑いの中で、神と菩薩はみな逃げてしまっただろう。⁽⁷³⁾

つまり、この物語は「湖南農民運動考察報告」の中の反迷信の主張を民衆向けに改編したものと見える。根據地において實際に毛像に代替された神像の多くは、個別家庭の幸福を司る竈神や財神などであり、竈神は庶民に最も近いが故に胥吏のように素行の悪い神と捉えられることもある。民間に人氣があり、正統イデオロギーにおいても高い地位を占める關帝は、土地改革の現場の神々よりも毛の權威を高める上で、物語に利用するのにふさわしいものであったと考えられる。土地改革に取材した小説、馮紀漢「翻身」も同様に、關帝廟に住む破産戸が關羽の塑像の上に毛像を貼って信仰しているという設定になっている。⁽⁷³⁾

譚吐「毛主席的故事」には「毛主席知道人民的事情」というもう一篇の傳説がある。物語の冒頭では、人民の心配事を解決する毛の姿と民衆の絶大な支持が敘述され、「爲人民服務」の毛のイメージが平易に語られる。その上で、毛が人民の事情に通じている理由として、數百の幹部を派遣して人民の聲を集めている、民衆の身なりをして各地を訪ねている、毎月數百の人民の手紙を受け取っているといった風聞がある一方で、毛は至る所に掲げられている自身の肖像を通じてそこで起きたことを知ることができるといふ説があることを紹介する。ある農民はその話を父親に聞かされて、小學校に掲げられた毛像を見に行き、妻に暴力を振うのをやめたとされる。

毛像が神像の代替として農村に導入された状況に鑑みれば、實際に民間にこのような風聞が広がった可能性も否定でき

ない。物語では直接指摘されないが、民衆の生活を見守り、その望みをかなえ、悪行を懲らしめる毛像の働きは、まさに神像のそれに一致している。また、物語は民衆の言動を好意的に描きながらも、これを民間の風聞としてのみ紹介している。このような毛の神的な威力を民衆の語りに託す手法は、以下に見るように毛の傳説の大きな特徴である。肖像を通じて毛と民衆の生活が一體化するというプロットは、文化大革命期に各職場において像の前で日々行われた「朝に指示を仰ぎ、夜に報告する」という儀式とも發想を共有している。これら譚吐による毛の傳説は、教材というよりも物語としての魅力に富むもので、口傳でも廣がるのが期待されているようにも見える。このような物語の出現は、讀者が中共政權下の各機關の構成員から、國民黨地區の都市民などのより幅廣い大衆へと廣がり始めたことに對應するものでもあろう。

康濯「毛主席萬歲 關於井的傳説」は井戸の起源についての革命の傳説で、『故事和傳説』に収録されている。物語は、老人の語りとそれを聞く「私」の敘述によって進められる。昔、悪い皇帝が龍王の眼を隠したために旱魃が起り、民衆は龍王廟に参り、龍王像を擔いで祈雨を行うが効果がなく、民衆を率いて龍王の眼を探す大男が、水脈を掘り當て井戸が生まれるというものである。老人は最後にその大男とは毛主席だと明かす。民間信仰の枠組みに、民衆の困難に解決策を與える毛の指導力、民衆の毛への信頼を位置づけるもので、祈雨を正面から批判することはないが、問題の解決は祈雨でなく毛の指導力によってもたらされている。また、老人の語りに託すことで作者が直接手を下さずに、民衆の素樸な信仰に寄り添う形で、神格化された毛の姿を表現することに成功している。

同書のもう一篇の「革命の傳説」である曹靖華「三五年是多久」は、瑞金を撤退する際に毛が残した「我々は歸ってくる。三五年で歸ってくる」という言葉の意味が、一九三五年でも、三、五年後でも、三十五八年後でもなく、三×五〇一五年後の一九四九年であったという物語である。この作品でも筆者の直接の筆によらず、一老農の語りに託して、民衆の毛に對する崇敬の念とその神格化された權威が表現されている。

治病や神藥に關する革命の傳説は比較的豊富であり、義人に關わる事物に藥效を求める神水・神藥の信仰が、革命指導

者や紅軍に關わる事物が起こす奇跡に置き換えられている。貧者を助ける精神を強調する革命の物語の典型的プロットを基礎に、義人が起こす奇跡への期待を込めた革命の傳説が成立している。毛の物語も、最初から民衆の治病に對する願望を取り入れる形で成立しており、上述の「孫澤東」は、先進的な技術や醫療を民衆のために惜しみなく使う毛の偉大さがテーマとなっているが、母親は「福に恵まれた人こそ毛主席に會える」と言つて子供を連れ出しており、毛と「福」の關係も暗示している。

治病に關する毛の傳説は、管見の限り確認できないが、毛が貧者を助けるプロットの中で、彼に關わる事物が奇跡を起こす傳説が存在する。唐人風（記錄）「草鞋船」は、裸足で炭を運ぶ貧民に毛が與えた草鞋が水害時に二隻の船となつて村人を救い、これを沒收した「白匪」が乗ると轉覆して彼らを河に沈めるといふものである。⁷⁵ 義人にかかわる事物が引き起こす奇跡に對する信仰がここに援用されており、多くの革命の傳説と同様、その威力には敵を制壓する力も認められている。ただし二年後の物語集では、草鞋が船になつて奇跡を起こす部分が削除され、一般的な物語になつて⁷⁶いる。管見の限り建國初期の毛の傳説で、民衆の語りに託さず直接奇跡が敘述されるのはこの物語のみであり、中共の許容しうる民間信仰の表現の範圍を超えていたため、修正が加えられたものとも考えられる。

おわりに

毛澤東の物語は、四〇年以降、その權威の最終的形成に伴い次第に形成され、元紅軍幹部の證言による人間味あふれる物語が生まれる一方で、傳記の成立と歩調を合わせて、共産黨員の基本的徳目としての「民衆の學生になる」、「人民に奉仕する」精神を自ら實踐する、自己犠牲の精神と民衆への慈愛に満ちた指導者のイメージを平易に表現するものとして發展していった。黨員幹部・兵士・青少年など教育を受ける環境にある人々は、特に整風運動以降、このような物語を通じて毛に學び、自らも模範として毛の精神を實踐するよう教育されるようになった。毛による人民の意志の解釋權と決定權

はこのような形で、組織的教育を受ける人々によって支えられることとなる。そして、ここには人民の意志を最も知り體現した英邁な指導者が人民の意志を回収していく過程が確認される。その過程は、善なる天の意志によって統治する眞命天子が、民意を天意に回収する構造にも通じるものであるといえよう。このような構造の下、毛の恩徳を父母の慈愛に例えてその權威を正當化する「忠孝一致」の物語が成立、普及していく。この過程において、人民の生死に關心を抱く同時代の毛の姿を擬制的血縁關係によつて表現し、その權威の説明を發展させる重要な轉機を作つたのは、中共を自由主義的な立場から批判し續けていた王若望であつた。

小論では、このような「人民に奉仕する革命」のために犠牲を厭わない精神が、どの程度社會に浸透したかについて検討できなかった。このような精神を社會に定着させるためには、政權の主導する社會改造が人々の生命財産を保證し、兵士の遺族や傷痍軍人に對する補償が充實しなければならぬが、この點について一つのエピソードを記しておきたい。

中國各地の治安・思想狀況や海外の報道等の情報に關する中共の内部資料『内部參考』によると、五三年六月頃、蘇北南部では復員兵が生活難に陥つており、揚州專署と各縣政府には毎日數十人の傷痍軍人が物乞いをし、部隊や北京にまで赴く者もあつた。彼らは、政府は我々を騙して「立功」させたと罵り、天下を手に入れると、障礙を負つても一生生活の面倒を見るといふ約束を反故にしたと不平を述べていた。毛像を背負つて物乞いをする傷痍軍人もいて、彼らは、あなたは昔我々に革命の指導をしたが、今日は物乞いの指導をしてもらおうと言つた（『内部參考』第一四一號、五三年六月二一日）。建國後四年近くがたつても、傷痍軍人の一部は生活に大きな困難を抱えており、「人民に奉仕する」偉大な領袖のイメージは、その背後で社會の最底邊からの厳しい批判を受け續けていた。

民間信仰の枠組みを利用して成立した毛澤東に關する革命の傳説は、毛を直接神格化するものではなく、物語の中の民衆の言動を通じて間接的にその神的な威力を表現するものであつた。書物上の物語も神仙を深く信じる基層民衆を直接の對象とするものではなかつたが、「大衆に學び、大衆とともに歩む」大衆路線の論理に照らせば、指導者を崇拜する民衆

の言動は、一旦は尊重されねばならない。これら毛の物語は、民衆の名を借りた壓力によって毛の神格化を促進するものであったといえよう。一方で建國初期の中共權力は、最基層の民衆に革命への献身を強いるだけの十分な社會保障を実施できる段階には達していなかったようである。民間信仰の文脈によって指導者を崇敬するこれら最基層の民衆にとつて、毛の權威は現世利益的で多神教的な信仰の中に位置づけられており、「天」の下で相對化される危険を孕むものであったとすれば、⁽⁷⁾權力が教育感化できる範囲にある人々への壓力こそが毛澤東崇拜を徹底させる上で、最も緊要なものであったといえよう。

註

- (1) 丸田孝志『革命の儀禮——中國共產黨根據地の政治動員と民俗』汲古書院、二〇一三年。
- (2) 石川禎浩「中國の赤い星」再讀、石川禎浩編『現代中國文化の深層構造』京都大學人文科學研究所、二〇一五年、一四―一六頁。
- (3) 三品英憲「一九四〇年代における中國共產黨と社會」『歴史科學』第二〇三號、二〇一一年。
- (4) 行論の都合上、丸田前掲著と同「民間信仰と「革命の傳説」——祈雨、變天、神水・神藥を巡る建國初期中國の民衆と權力」、笹川裕史編『戦時秩序に集う「聲」——日中戦争・國共内戦・朝鮮戦争と中國社會』創土社、二〇一七年の内容と若干の重複があることをお断りしておく。
- (5) 石川禎浩『赤い星は如何にして昇ったか 知られざる毛澤東の初期イメージ』臨川書店、二〇一六年、八六―一頁。「毛澤東傳略」は『黨的文獻』一九九二年第二期に一頁。
- (6) 王政明『蕭三傳』北京圖書館出版社、一九九六年、二五二―二五四頁。『不可征服的中國』収録の傳記の中國語譯は『黨的文獻』一九九一年第三期、第四期に掲載。その他、蕭三による毛澤東傳の執筆過程については、以下を参照。高陶『蕭三』中國青年出版社、一九九一年、周一平『毛澤東生平研究史』中央黨史出版社、二〇〇六年、葉介甫『蕭三 第一個爲毛澤東寫傳的人』『黨史縱橫』二〇一二年第一期。これらは四三年以前の蕭三による傳記執筆を彼の自發的な行爲として描き、中共の組織的關與には言及していない。
- (7) 高華『紅太陽是怎样升起的 延安整風運動的來龍去脈』中文大學出版社、二〇〇〇年、一六一―一七一頁。
- (8) 「中國共產黨在民族戰爭中的地位 一九三八年一〇月在擴大的六中全會的報告（論新階段的第七章）」毛澤東文獻

- 資料研究會編『毛澤東集』第六卷(第二版)、蒼蒼社、一九八三年、二四五頁。
- (9) 「在延安文藝座談會上的講話」(一九四二年五月)では、「民衆の學生となつてこそ、民衆の先生となることができ」る(『解放日報』(一九四三年一〇月一九日)と指摘されている。
- (10) 王政明前掲書、二五二～二五三頁。
- (11) 徳田教之『毛澤東主義の政治力学』慶應通信、一九七七年、六四～八七頁。
- (12) 丸田前掲書、一六五～一六六頁。
- (13) 収録されているのは、毛澤東、朱徳の他、徐特立、周恩來、劉伯承、賀龍、周保中、粟裕、王震の記事で、『人民日報』『群衆』に掲載されたものが多い。
- (14) 王政明前掲書、二八五～二五三頁、高陶前掲書、二五七～二五八頁。
- (15) 「我所知道的毛澤東同志的少年時代」は、蕭三が執筆を進めていた傳記の一部と考えられるが、記事において内容などについて特に説明はされていない。
- (16) 周一平前掲書、七〇頁。
- (17) 王政明前掲書、三四〇頁。
- (18) 周一平前掲書、七〇～七一頁。
- (19) 高華前掲書、二六一～二七二頁。
- (20) 丸田前掲書、一六七頁。
- (21) “The Autobiography of Mao Tse-Tung, as Told to Edgar Snow”, *Asia*, July-October, 1937.
- (22) 王政明前掲書、三二四頁。
- (23) “BOYHOOD OF A CHINA RED: The Autobiography of Mao Tse-Tung as Told to Edgar Snow”, *Asia*, July, 1937. pp. 482-483. 日本語譯は、松岡葉子譯『中國の赤い星』(増補改訂版)、一九七二年、筑摩書房、八七頁による。
- (24) 「對『毛澤東故事選』幾點要更正」『北方文化』第一卷第六期、一九四六年五月一六日。この史料は石川禎浩氏より提供を受けた。
- (25) “BOYHOOD OF A CHINA RED”, p. 483. 前掲『中國の赤い星』、八七頁。
- (26) 實際に毛は一五歳の時に母の病氣回復を願つて、南嶽衡山に願掛けに赴いている。中共中央文獻出版社研究室編・金冲及主編『毛澤東傳 一八九三—一九四九』中央文獻出版社、一九九六年、三頁。
- (27) “BOYHOOD OF A CHINA RED”, p. 483. 前掲『中國の赤い星』、八九頁。
- (28) 王政明前掲書、三二四頁。
- (29) 王若望の生涯については、王若望『自我感覺良好 王若望自傳』第一卷、第二卷、明報出版社、一九九一、一九九二年を参照。
- (30) 王若望前掲書、第二卷、三三五～三三六頁。
- (31) 『東北日報』一九四五年一月一〇日において六篇がまとまった形で確認できるが、作者名は記載されず、後述するような若干の修正が施されている。
- (32) 『解放日報』一九四二年三月一〇日、納海「張浩：毛澤

- 東爲其擔棺的人」『黨史縱覽』二〇〇六年第二期、三一頁。
- (33) 「爲人民服務」の物語の成立と軌を一にして、晉察冀邊區では『毛澤東選集』の初版が刊行されている(晉察冀日報一九四四年九月一六日)。
- (34) 劉少奇『修改黨章の報告』東北書店、一九四七年、七、八頁。
- (35) 張聞天「在中國共產黨第七次代表大會的發言」(一九四五年五月二日)『中共黨史資料』第五三輯、中共黨史出版社、一九九五年、一五頁。
- (36) 上述の徐特立の文章にも「毛主席の民衆と下級幹部への對應は、母親の子供に對する態度であり、實に粘り強い」という敘述があるが、物語において血縁の比喩を使用したのは王の作品が最初である。
- (37) 岸本美緒「中國の「家」と社會團體」、岸本美緒・宮嶋博史『明清と李朝の時代』中央公論社、一九九八年、四六九～四八二頁。
- (38) ただし戦後の比較的早い段階で、父の厳しさという表現は、醫者の患者に對する厳しさという表現に替えられている(『東北日報』一九四五年一月一〇日)。
- (39) 「孫澤東」では、母親が毛の恩徳を記念して、息子に澤東という名前をつけたことになっているが(『战友報』一九四四年六月三〇日)、同年九月の大衆日報刊『毛澤東的故事』の廣告において題目は「毛澤東愛護小孩」とされており、一九四五年一月一〇日の『東北日報』掲載の「毛澤東愛護小孩」では子供の名前を變えたエピソードは削除されている。「在戲院裏」では、子供に「虱がいるじゃないか」と話しかける箇所が建國前後に削除されている(毛主席在戲院裏)『春季始業用初級小學國語課本』第七冊、華北新華書店、太原初版一九五一年「一九四八年初版」(四～五頁)。
- (40) 丸田前掲書、第四章、第五章。
- (41) 一九四五年には、冀察軍區政治部、東北新華書店から『毛澤東的故事』が、新華書店晉察冀分店から蕭三『毛澤東故事選』が刊行され、翌年には呂梁文化教育出版社から『毛澤東的故事』が刊行されている。
- (42) 蕭三等著『毛澤東故事』東北書店、奥附なし。
- (43) 前掲蕭三等著、二五～二九頁。
- (44) 『毛澤東故事』東北書店、一九四八年。
- (45) 「我們看到了毛主席——記中央團校第一期畢業典禮一個場面」『中國青年』第一八期、一九四九年九月。
- (46) 「朱總司令多麼愛小孩呀！」同上第八期、一九四九年五月。
- (47) CH IX 『作文簿』太行山文書、邯鄲學院藏。
- (48) LJS 『日記』(一九四九年一月三日)太行山文書、邯鄲學院藏。學校所在地の特定は、喬福錦「太行文獻專題敘錄」『邯鄲學院學報』第二七卷第四期、二〇一七年による。
- (49) 「去了一块心病」『初級新課本』第七冊(表紙・奥附缺)、六三頁。
- (50) 「送神歌」、華北人民政府教育部審定『國語課本』初級小

- 學適用第七冊、新華書店、一九四八年、七〇九頁。「中國青年代表在國外」、楊少章『初級幹部國語課本』太行新華書店、一九四九年。福林『請毛主席到我家探望』『中國青年』第四期、一九四九年二月。晉察冀邊區行政委員會教育廳審制『國語課本』初級小學適用第六冊、晉察冀新華書店、一九四八年再版、四三頁、および建國後のテキストでは「叩頭」が「揖」となっている。
- (51) 「家裏吃穿不作難、只盼一張報功單」『戰友報』一九四七年一月二三日。
- (52) 楊昊成『毛澤東圖像研究』時代國際出版、二〇〇九年、八八〜九〇頁。
- (53) 霄朗「毛主席能治精神病」『新大眾』一九四七年第三三期。
- (54) 王且林「毛主席比我更辛苦」『新大眾』一九四七年第三三期。
- (55) 「做毛主席的小學生」『初級幹部國語課本』第三冊、一九五〇年增訂版（一九四九年初版）、五五〜五六頁。
- (56) 西北局宣傳部編『黨員課本』晉南工作委員會複製、一九四九年、五八頁。
- (57) 大衆報主編・溥白蘆編寫『大衆政治課題本』第一冊（中國共產黨）、湖南通俗讀物出版社、一九五一年、二八〜三〇頁など。ただし、中國人民解放軍東北軍區編印『黨員課本』第一冊（中國共產黨）、一九四九年、六〜八頁では、毛が人民の勤務員であり、黨の規律に従うといった表現は削除されている。
- (58) 「井崗山上人民的回憶」『新華月報』第一卷第三期、一九五〇年一月。
- (59) 「路遇傷兵」『毛澤東的故事和傳說』、八〜九頁。
- (60) 「最重要的是工作」『這才是紅軍的戰士』『毛主席的故事』黑龍江人民出版社、一九五八年、一一〜一八頁。
- (61) 「孩子、拿起槍保衛毛主席！」、王橋編寫『毛主席在延安的時候——延安農民講的故事』陝西人民出版社、一九五七年、一〇〜一四頁。
- (62) 「鐵腳團長」『高級小學國語課本』六年級用、東北書店重印、一九五三年（新華書店、一九五二年初版）、三六〜三七頁。毛の言葉は中共七期二中全會の「中國共產黨第七屆中央委員會第二次全體會議上的報告」（一九四九年三月五日）『毛澤東選集』第四卷、人民出版社、一九九一年、一四三〜一四四頁で述べられたものである。
- (63) 「過橋」『高級小學國語課本』六年級用、新華書店、二七〜二八頁。
- (64) 『革命導師的故事』上海童聯書店、一九五〇年。
- (65) 「黨委會的工作方針」（一九四九年三月一日）『毛澤東選集』第四卷、人民出版社、一九九一年、一四四〜一四五頁。
- (66) 『一九五三年農曆通書』劉德記書局、一九五三年、『一九五四年中華民國中華人民共和國農曆通書』興華書局、一九五四年。
- (67) 高華前掲書、六四五頁。
- (68) 李衛國「一部新發現的紅軍長征稿本『二萬五千里』——贍清稿本文獻價值初探」『黨的文獻』二〇〇六年第六期。

- (69) 李季『毛澤東同志少年時代的故事』中南人民文學藝術出版社、一九五四年、陳子君『毛主席少年時代的故事』天津人民出版社、一九五六年。
- (70) 丸田前掲論文。
- (71) 譚吐「毛主席的故事——陝北民間傳說」『文藝報』第一卷第八期、一九四九年、二〇～二二頁。
- (72) 「湖南農民運動考察報告」『毛澤東集』第一卷（第二版、一三三頁。
- (73) 華應申編『翻身』新華書店、一九四八年、二八頁。
- (74) 丸田前掲論文。
- (75) 「草鞋船」『少年文藝』第六期、一九五六年、五三～五六頁。
- (76) 「一雙草鞋」『毛主席的故事』黑龍江人民出版社、一～四頁。
- (77) 丸田前掲論文。

Furthermore, the Wang Jingwei regime failed to develop party organizations due to Japanese interference and lack of funding. In contrast, teachers were an important faction supporting the Wang Jingwei regime, and the regime therefore valued the teachers and gave impetus to the educational development.

Today, many researchers (especially Chinese researchers) believe that education under the Wang Jingwei regime was “education for enslavement” that served the Japanese empire. However, this paper reveals that the content of the education and the ideology promoted by the Wang Jingwei regime was a Chinese nationalism that might even be termed cultural nationalism. The Wang Jingwei regime emphasized such Chinese nationalism in promoting its ideology and legitimacy. This was on the one hand, due to the fact that the Wang Jingwei regime aimed to gain the support of the general public, teachers and students, while on the other hand it was an expression of a spirit of resistance within its “collaboration”.

The promotion of educational development under the Wang Jingwei regime tended towards publicity and mobilization, and the regime ultimately failed to solve the shortcomings of school education in the 1930s summed up by the words “graduation mean, unemployment,” which had existed since early Republican times. Therefore, even though the Wang Jingwei regime emphasized “Chinese nationalism,” it could not gain the support of the majority. Furthermore, the rule of Wang Jingwei regime could not penetrate local society. In contrast, the contemporary Chongqing Nationalist Government was able to successfully extend its rule through local society by linking education with its administration.

THE TALES OF MAO ZEDONG : THEIR CREATION AND DEVELOPMENT FROM THE SINO-JAPANESE WAR TO THE EARLY PERIOD OF THE FOUNDATION OF THE PRC

MARUTA Takashi

The tales of Mao Zedong were gradually created after 1940 with the establishment of Mao's authority. Tales highlighting his humanity were created on the bases of testimony by a former Red Army officer. In concert with the creation of his biography, those tales were further developed, representing him in terms of the spirit of self-sacrifice and in the image of a benevolent leader of the people who put into practice the spirit of “a student of the people” who “served the people.” Especially after the Yan'an Rectification Campaign, those in educational settings,

such as party members, soldiers, and youths, were taught to learn from Mao Zedong by reading those tales and to practice the spirit of Mao Zedong as exemplary members of society. In this way, Mao Zedong's right to interpret and determine the "will of the people" was supported by those who had received this systematic education. Thus we can confirm the process of the formation of the idea of the infallible, great leader who is well acquainted with "the will of the people" and embodies it as he has recovered it. This can be seen as confirming to the narrative structure in which the Son of Heaven who governs by the good will of Heaven recovers the will of the people due to the intention of Heaven. Premised on such a structure, tales of "loyalty coinciding with filial piety," which likened the benefits of Mao to the love of parents and asserted the legitimacy of such authority, were created and disseminated. In this process, Wang Ruowang, who continued to criticize the CCP from a liberal standpoint, seized the opportunity to create tales depicting the contemporary figure of Mao Zedong as deeply concerned with the people's life and death, using metaphors of blood relationships.

The legend of the revolutionary Mao Zedong, which was created using the framework of folk religion, did not directly deify Mao Zedong, but indirectly expressed the workings of divine authority through the words and action of the people in those tales. Although the tales in the book did not directly target the strata who believed in such divinity, in the light of the logic of the popular slogan to "learn from the masses and work with the masses," the words and deeds of the people who worshiped their leader must be respected, and those tales promoted the deification of Mao Zedong through the pressure applied under the pretext of the people's will.